No.

# 政務活動費 視察・研修会等 報告書（歌代公司）

| | |
|---|---|
| 視察都市 | 福岡県北九州市（人口 922,665 人:令和 5 年 9 月 30 日現在） |
| 視察日時 | 令和 5 年 10 月 24 日（火）<br>午前・午後 2 時 30 分～午前・午後 4 時 00 分 |
| 視察項目 | ・八幡近代化遺産コース<br>・北九州観光コンベンション協会ガイドボランティア活動 |

◎視察概要

視察項目　・八幡近代化遺産コースと北九州市観光ガイドボランティアの活動について

（1）説明要旨　※以下の説明は、北九州市観光案内ボランティアの原 秀孝(はら ひでたか)さんの説明と、世界遺産ビジターセンター(スペース LABO ANNEX)内の展示資料などの要約である。

◎「なぜ、八幡に製鉄所がつくられたのか」

- 日清戦争後、軍備増強と産業資材用鉄鋼生産の増大を図るため、1896 年（明治 29 年）に、第 9 回帝国議会で製鉄所建設の「創立案」の予算が承認された。
- その内容は日清戦争前に「野呂景義」が提案した製鉄所建設構想とは異なり、和田維四郎（わだ つなしろう）による、銑鋼一貫の巨大製鉄所構想であった。
- 初代長官の山内提雲の後任で、2 代目の長官となった和田維四郎が、製鉄所創立の中心的な役割を果たす。

和田維四郎

大島道太郎

- 技監は本来なら、日本で初めてコークス炉を使った製鉄法を成功させ、日清戦争前まで製鉄所建設構想を作り上げた「野呂景義」が考えられるが、初代長官の山内が、「大島道太郎」を任命した。大島道太郎は、近代製鉄の父・大島高任の長男。
- 総予算額 650 万円、その中に清国から受け取った賠償金のうち 58 万円が含まれる。

◎　製鉄所建設地の検討

- 1896 年に政府によって 17 の地域が候補地として選ばれた。そのなかの３地域が北九州。
- ①青森　②釜石　③塩釜　④千葉　⑤品川　⑥鶴見　⑦静岡　⑧和歌山　⑨梅田　⑩尾道　⑪呉　⑫大竹　⑬大牟田　⑭長崎　⑮大里（門司）　⑯板櫃（小倉）　⑰八幡（八幡）
- 各候補地とも郷土に近代的な製鉄所をと意気込み誘致活動を展開し、互いに一歩もゆずらなかった。
- 大島道太郎が候補地決定の責任者となり、調査団を率いて候補地を調査した。
- その立地の条件は、
  ①広大な建設用地が安価で得られる
  ②海上・陸上の交通の便がよい
  ③原料と燃料が得やすいこと
  が考慮された。
- 調査の結果、①呉（広島県）②大里（門司）③板櫃（小倉）④八幡（八幡）の４ヶ所に絞られる。

呉

板櫃、大里(門司)

八　幡

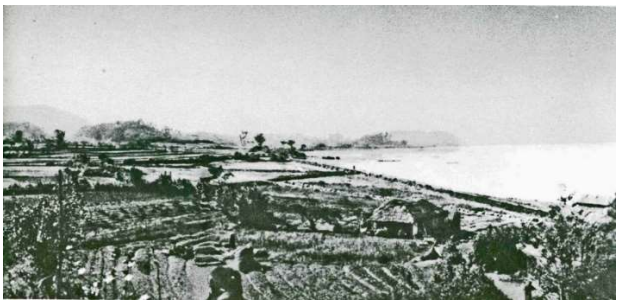
- 原料と燃料入手の点で呉は落ちて、北九州の三村が残る。
- その中で、大島は、「石炭に入手には洞海湾（八幡）だが、若松港の水深が浅く、到底大型船を出入りさせることができない」と、一旦は「大里第一」とした。
- 大里は、筑豊炭田を背後に持ち、アシが生い茂る湿地帯が多い土地、海陸の交通条件に優れ、八幡が足元に及ばない人口を抱えていた。
  更に、江戸時代に村の一角から鉄鉱石と銅鉱石が採掘されていたことも影響している。
- これに対して、若松築港会社会長の安川敬一郎は、水深を深くすれば大里に勝ると確信し、起死回生の政治工作を行う。
- 旧黒田藩主・金子堅太郎、岩崎弥太郎、渋沢栄一の同意を得、渋沢栄一と後の長官和田維四郎を通じて、大島と長官山内堤雲の説得を依頼した。
  こうした安川敬一郎の運動が紅を奏し、用地買収担当の製鉄所事務次官に八幡出張の辞令が出された。

- この「旧黒田藩に製鉄場を」という工作は、わずか数日で大里(門司)に決まりかけていた方向を逆転させた。

安川敬一郎

芳賀種義

- 当時の八幡村は、人口 2,000 人足らずの農業と漁業を営む寒村であった。
  製鉄所建設用地確保のため、八幡村の芳賀種義村長が「八幡村に製鉄所を、日本の鉄づくりは八幡から」と熱心に村民を説得し、100 万ｍ２もの広大な土地を地価の半値で売り払うことに協力してもらった。



製鉄所建設前の八幡村

- こうした後、1897 年 2 月 6 日に「官営製鉄所は福岡県 下筑前国遠賀郡 八幡村に置く」と公布された。そして、1901 年の創業に向けての建設工事が開始される。
- ドイツのグーテホフヌンクスヒュッテ(GHH)社に設計を依頼し、技術指導を受けた。4 年の建設期間を経て、1901 年 2 月に東田第一高炉に火入れが行われ稼働が開始。
- しかし、トラブルや資金難により翌 1902 年 7 月には休止を余儀なくされたため、釜石田中製鉄所で日本初のコークスによる銑鉄生産を成功させた野呂景義に再建が託される。野呂は高炉の改良と新たなコークス炉の建設を行い、1904 年 7 月から本格稼働を再開。これにより、日本の高炉操業技術が確立され、日本の産業近代化（重工業化）が達成される。
- 製鉄所は 1930 年代にかけて拡張され、周辺にも多くの産業が集積し、北九州工業地帯の主要拠点となった。
- 事業所内にあり秘密保持に懸念があることや老朽化していることから、いずれの施設も見学はできない。登録面積は 1.71 ha（緩衝地域 33.81 ha）である。

◎旧本事務所

1899 年に建設された赤煉瓦組積造の建物。製鐵所の技術者による設計。骨組はクイーンポストトラス組み、煉瓦積みはイギリス式の一方、屋根は和式の瓦葺。1922 年まで本事務所として使用された後、鉄鋼の研究所として使用された。

見学不可だが、2015 年 4 月に眺望スペースが設けられて遠景を見ることが可能となり、登録後から個人利用に限り写真撮影が認められている。

視察時に撮影した写真　これ以上近づけない

地元キャラクターと写真が撮れるアプリもある

◎修繕工場

1900 年に建設された鉄骨造の建物。設計及び使用鋼材は GHH 社による。

現存する日本国内最古の鉄骨建築物。3 回に亘り増築されたが、使用された鋼材がドイツ製から次第に日本製へと変わり、日本の製鉄技術が発展する過程を示すものとなっている。

八幡の工場群で、この「修繕」工場が真っ先につくられたのは、工場、鉄道、製鉄炉をつくるための鋼材は、すべて輸入しなくてはならなったからである。

ドイツから長期間にわたって船で運んできた鋼材は、歪んでしまい、「修繕」する必要があったのである。

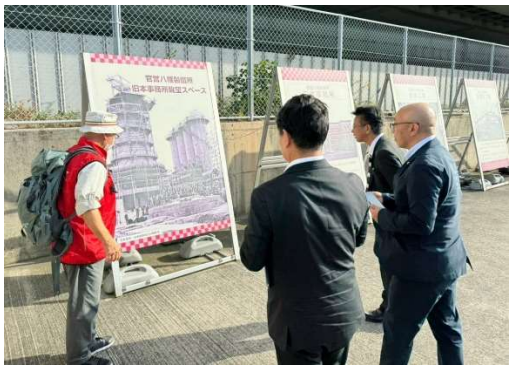
現在は新日鉄住金の主要な協力会社の一つである山九により、製鉄所で使用する機械の修繕や部材の製作が行われ、115 年経過した工場天井クレーンは国の検査も通過して、現在も現役で稼働中である。見学は不可。

◎旧鍛冶工場

1900 年に建設された鉄骨造の建物。設計及び使用鋼材は GHH 社による。
製鉄所で使用する鍛造品、スパナやハンマーなどの製造が行われ、大正時代に現在の場所に移転してからは製品試験所として使用された。
上記の修繕工場と合わせた「工場をつくるための工場」を真っ先に建造したのである。
現在は創業時からの資料を保管する史料室となっている。見学は不可 。

◎北九州市観光案内ボランティア

- 北九州市観光案内ボランティアが地元ガイドとなり、北九州の観光名所を来訪者と一緒に歩きながら案内するサービス。
- 観光パンフレット等には載っていない地元ガイドならではの知識豊かな観光案内を展開している。
- 地元ガイドのお勧め「まち歩き観光コース」(全 8 コース)がある。



◎視察成果による当局への提言または要望等

「八幡近代化遺産コース」を、観光案内ボランティアの方に導かれながら拝観し、実感できたことは、以下の２点である。

①観光として近代化遺産を訪れた際、その建物、施設などを身近に見たり、なかに入ったり出来るか否かで大きく印象は異なる。

②まちなかに点在する遺産をどのように説明するかの方法論

まず、①に関してだが、今回、八幡製鉄所は改修中であった。

離れたところから見ても、その巨大さには畏敬の念を覚える程であった。

それでもなお、「中からも拝見して、建造当時の人々の息吹を感じられたなら」との思いは抜きがたかった。

同様に、諸般の事情で近づけないとされた「旧本事務所」も、出来れば、より近くで、更には、内部からも拝見したいという思いは強かった。相応の距離から見られる眺望スペースや、地元キャラクターとの記念写真が撮れるというアプリが用意されていたところから、北九州市の「なんとか身近に感じてもらいたい」という苦心の跡がうかがえた。

しかし、やはり、間近に見られる、できれば触れられる、ということの人に与える心象の大きさは計り知れない。桐生市にある有鄰館や明治館、ベーカリーカフェ・レンガなどとの違いを大いに実感した。桐生市に残る重伝建の街並みも同様である。

これらには、市民の協力が欠かせない。現在、桐生市で日本遺産を身近に感じられることに、あらためて深い感謝の念を覚えた。身近であるがゆえに、桐生市当局にも、間違っても「あって当たり前」のような考え方にならないように、と、切に要望するものである。

②に関してだが、北九市の「世界遺産ビジターセンター」は、広い通りから近く、非常に豊かなスペースのなかに存在する。これは単独で存在するのではない。近くに、宇宙や化学について学べる科学館や、世界的な恐竜の化石レプリカから古代の遺物など、展示総数 6,000 点を超える「いのちの旅博物館」がある。ここでは、地元の古代から現在までの、環境、文化、工業、生活の変遷が学べる。

桐生市にも、このような「市の歴史、文化の変遷、重伝建等について総合的に学べる場所」が不可欠だと感じた。

祭りに参加したり、飲食店や街並みを巡ったりすることも有意義だが、「全般的に、包括的に桐生について知りたい」という学生や、訪問した人たちが様々な資料や、知見のある専門家と対話できる場所の存在が、今後の観光振興にも、「誇りあるまち」として桐生市が生き残るためにも、不可欠であると考える。

上記のような観点から、今後の「桐生市中央図書館」の担う使命の大きさ、求められる施設の将来像を検討していただきたいと、切に要望するものである。

◎所　感

北九州市といえば、60 年前、昭和 38 年に世界でも稀だと言われた大規模な「五市合併」で出来た都市である。明治から昭和にかけて発展した大きな五市が「対等合併」し、現在でも 90 万人以上の人口を擁している。

日本を代表する貿易港があった門司市と、江戸時代からの城下町である小倉市は旧小倉藩・豊前の国。官営製鉄所のある八幡市、良質な石炭の集積地であり日本一の貨物取扱量であった若松市、鋳物や水産業で栄えた戸畑市は、旧黒田（福岡）藩・筑前の国であった。両国は互いに競い立つ関係であった。両地域の境には城跡が多く、住宅地に「国境石」が残っており、現在でも方言が異なることなどにその名残がある。

このように数百年にわたって競い合った地域が一つとなった巨大な自治体と、現在の桐生市を単純に比較はできないが、地元文化を　重んじる姿勢にも学ぶ点が大きかった。

お世話になった観光案内ボランティアの原さんによると、巨大なスペースシャトルの模型で有名であったスペースワールドが閉園した後地に、今回伺った「世界遺産ビジターセンター」を含む「スペース LABO」や、地元の歴史・文化を古代から体感できる博物館、西日本初の英語教育体験型施設「北九州グロバルゲートウェイ」が　建っているとのことであった。

地元の歴史、文化を包括的に学び、体感できる施設のあることは、大変うらやましく感じられた。

例えば、桐生市でも、桐生八木節祭りに参加する市民は多いが、その歴史や桐生祇園祭との違いなどを明確に理解している人はどれほどいるだろうか、と改めて考えさせられた。

現在の桐生市は、ここまで桐生市で生きた先輩市民の成果である。その歴史、そこに込められた思いを知らずに、現状を「当たり前」としか感じない人たちのつくる未来は、次代の桐生市民に喜んでもらえるものになるとは思えない。

それゆえに、北九州市ほどではなくとも、桐生市の歴史や文化、それらが日本に与えた影響などを包括的に学べる場所、調べられる場所はどうしても必要だと感じる。

広大な敷地や、巨大な施設は必要ないと思う。市民から借りたり、寄付いただいた文物や書籍などを、しっかりと安全に保管できて、地元の古代からの遺物も展示できるような、「充実した収容スペースと、地元の歴史・文化に知見のある人が常駐する図書館」は、どうしても必要なものであると、あらためて深く実感した視察であった。